

< 国内情勢 >

## 一千葉県知事<森田健作>・川越市長<川合善明>一

### こいつら、どっちもどっちだ！

「台風襲来」から「逃げ出した知事」を「糾弾」する

#### 上機嫌で帝国ホテルに向かった千葉県の森田知事

帝国ホテルに向かう車の中で、森田健作知事は上機嫌だったに違いない。午後4時45分からの「日米合同委員会」に出席し、午後6時から米国来賓歓迎のレセプションが開かれる。ここで日本側4人、米国側4人の来賓挨拶があるが、森田知事はその挨拶人の一人に選ばれていた。その後は大好きなパーティーである。心がはやるのは当然だ。車の窓を打つ激しい雨のことは気にならなかったかもしれない。

8月末に誕生した熱帯性低気圧は9月5日に台風15号となり、北上するにつれて巨大化。予報では、そのまま関東地方を直撃すると発表された。「非常に強い」レベルを保った台風が関東を直撃することは珍しい。2年前の台風21号以来だろう。

気象庁は前日7日の午後7時過ぎに、台風が関東に上陸するだろうと発表。8日午前中には異例の緊急記者会見を開き、記録的な暴風雨に対して警戒を呼びかけていた。森田知事が東京の帝国ホテルに向かったのは、そんな状況下である。この激しい雨を車窓から見ながら、それでも心を弾ませてパーティー会場に向かったのだとしたら、**能天気のおバカさん**と言われても仕方ない。激しい風雨など、目にも耳にも入らなかったとしたら、知事以前に**人として失格**と烙印を押されて当然である。

ちなみに日米合同委員会とは昭和35年(1960年)の日米安保改定の時に作られた政府間の協議機関で、日米両国にとって非常に重要な会合である。では日米合同委員会と県民の生命財産とはどちらが重要か……。

知事にとって、県民の生命財産は自分の命よりも大切なもの。首長たる者、何を置いてもまず県民の生命財産を守る行動をとらなければならない。

## 「県災害対策本部」設置は台風上陸の翌々日

台風 15 号は 8 日夜に強い勢力を保ったまま関東に接近、日付けが変わった 9 日午前 3 時前に三浦半島近くを通過して午前 5 時前に千葉市に上陸した。千葉市では瞬間最大風速 **57.5m** (秒速) の「観測史上最速」を記録。ウェザー・リポートの調査によると、千葉県では半数以上が「全然眠れなかった」と答え、「時々眠れなかった」を加えると千葉県の **86%** が台風の影響で眠られなかったという。

本紙が千葉市に住む知人に電話で尋ねたところ「**風が激しく、外を見ると街路樹が根こそぎ倒され、眠るなどという状況になかった**」という話だった。この知人の住所は千葉市花見川区だが、千葉市中央区都町の千葉県知事公舎とは至近の距離だ。公舎で寝ていた森田知事も、状況は変わらなかったろう。

BBC ニュース日本語版は「**過去最強の台風**」と表現、実際は過去最強ではなかったものの、その被害は甚大だった。千葉県内では倒木を片づけようとした男性、屋根の修理をしようとした男性など **3人が死亡**。その他、停電時に電源が確保されなかったため、熱中症を起こした方もおり **7人が死亡** している。台風が通過した直後の 9 日は、千葉県内の JR が始発から全面ストップ。京成線の一部などが動いたが、通学の学生・通勤のサラリーマンの足は奪われたままだった。

県内の多くで停電が発生、水道もガスも停止。そうした中、県内の多くの市町村は災害対策本部を立ち上げたが、千葉県庁が災害対策本部を立ち上げたのは台風上陸の翌々日となる 10 日午前 9 時になってから。しかも県職員の現地視察や災害救助法の適用は 12 日のことだった。後手後手などというレベルではない。

千葉市のだ真ん中の知事公舎にいた森田知事は、一体何をやっていたのか。

それを暴いたのが **文藝春秋社** の『**文春オンライン 10 月 3 日号**』だった。

「**これでいいのか森田健作・千葉県知事 台風の最中に都内で乾杯、年休 151 日…仕事ぶりに批判**」。さらに週刊誌 **週刊文春** が追い打ちをかけた。同誌 11 月 14 日号の特集『**森田健作千葉県知事 台風被害の最中に「公用車で別荘」疑惑が浮上**』である。

## 森田知事は災害対策本部から「別荘へ脱走！」

早朝からテレビが台風の影響を報じていた 9 日、森田知事は動かなかった。どうやら一日名中、自宅である **知事公舎に閉じ籠っていたらしい**。県内で被害が続出、死者の報や倒木被害が報道され、50 万戸以上が停電・8 万戸以上が断水・熱中症で倒れる人も続出。そんな中、第一線で陣頭指揮をとるべき知事は自宅に籠っていたというから、呆れた話である。そもそも森田知事は「**年休 151 日**」と休みが多い知事だが、県庁に出勤しても「**1日1時間以内で業務終了**」という日が **62 日** に及ぶという。

仕事など、まるでしていないのだ。台風被害が酷くても、公舎から一步も出ないことが普通なのかもしれない。県庁に災害対策本部が設置された10日には、午前9時過ぎに姿を見せたが、午後3時前には公用車に乗って外出してしまった。行き先は芝山町にある知事の「別荘」である。公用車で別荘に出かけたという話が週刊誌に載り、ネット上でも批判が相次いだ直後、記者会見に臨んだ森田知事は、こう胸を張った。

### 「別荘ではなく、私の自宅なんですから。それは明確にしたいと思います」

しかし6年前の平成25年（2013年）以降、森田知事は現住所を千葉市中央区都町の知事公舎と届け出ている。夫人と3人の子供も、この現住所に住んでいる。日本人の普通の感覚からいえば、役所に届け出ている現住所が自宅であり、普段誰も住んでいない家は「別荘」と呼ぶ。「私の自宅なんですから」と胸を張るのもおかしな話だ。

家々の屋根瓦が吹っ飛び、ゴルフ場の鉄塔が倒壊し、樹木が根こそぎ叩きつぶされる悲惨な状況を前にして、自分の別荘が気になったことは理解できる。

だが県庁で陣頭指揮をとるべき「災害対策本部長」が、現場を離れて自分の別荘の様子を見に行くなど言語道断。そんなに気になったのなら、知り合い…部下にでも様子見を頼めばいいだけの話だ。「県知事」という立場を完全に**放棄していた**と言われて当然である。

## 貸し出されなかった発電機。稼働すれば助けられた人命も…

9日午前中に**50万戸以上が停電**していた千葉県だが、その復旧は遅々として進まなかった。台風上陸から1週間が過ぎた15日でもなお、**7万戸以上が停電状態**だったのだ。この状況を受け森田知事は「電力がなければ県民生活はどうにもならない。東電には**不眠不休でやってほしい**」と東電を厳しく批判している。では災害対策本部長である千葉県知事は、不眠不休で頑張っていたのかと問いたい。それから10日を経た26日にもなお、**1万2000戸で停電**が続いていた。この状況下、千葉県が災害用に備蓄していた「**発電機**」の半数以上が倉庫に眠ったままだったことが判明する。

千葉県は非常用に**発電機を468台保有**していた。そのうち貸し出したのは**6台**。

県北部の神埼町と南部の鋸南町の2町だけだ。他に千葉県警が信号機を動かすために210台を借り受けている。**残り252台**は防災倉庫に**眠ったまま**だった。停電がなければ熱中症も防げた可能性があるし、緊急搬送された人命も助かったかもしれない。

なぜ発電機は活用されなかったのか。県は、こう答える。「**要請がなかった**」。

千葉県が災害状況確認のために職員を派遣したのは台風上陸から4日目となる12日のことだった。なぜそこまで遅れたのか。これに対して県は「**被災状況がシステムに入力されていなかったため**」と応じている。

亡くなった人の情報がテレビで報道され、大規模停電が起き、水道が断水しても「被災状況が入力されていなかったから動かなかった」というのだ。これが行政のやることだろうか。森田知事自身、14日までは現地視察を行っていない。視察が大幅に遅れた理由について、森田知事はこう説明する。

**「やみくもに早く行くのではなく、県の体制をしっかりとしてから視察した」。**

千葉県民が怒り心頭となったことは、どなたも理解されるだろう。

前出の千葉市に住む知人がこう語る。

「ええ、前回の知事選には投票に行きました。実は森田に投票しちゃったんです。彼がいいというのではなく、他の無名候補や新人のことを知らなかった。しかし、間違っていました。ウチの子どもは小学校でクラス委員をやっていますが、小学校のクラス委員のほうはまだまし。非常事態に自分が率先して動かなければならないということを知っていますから」。

今日、世界的に異常気象が続き、自然災害が多発している。この先数年以内に、巨大地震や大雨など激甚な災害がやってくることは確実だ。自分の身は自分で守らなければならないのは当然。それでも、災害時に頼りになるのは行政だ。生命財産を守るためにも、知事、市町村長の職責は重大であり、それを選ぶ県民・市民の自覚が重要となる。

## 「2年前の川越市の現実を思い出せ！」

### 台風襲来…何の備えもせず…自宅で寝込んだ最低な市長

千葉県の森田知事が週刊誌マスコミに叩かれて当然である。なにしろ森田健作といえ、昭和の末期に青春ドラマで活躍した俳優で歌手、タレントである。参議院議員1期、衆議院議員を2期務め、平成21年(2009年)に千葉県知事に当選して以来、テレビに顔を出す機会も多い。様々な催しの席に出ると、即興アカペラで『さらば涙と言おう』を歌い、タレント議員の面目躍如。そんな森田健作だから、週刊誌マスコミが大きく取り上げたともいえる。全く同じ状況、いや森田知事以上の不手際・醜悪なごまかし答弁をしておきながら、大きく報道されなかった事件がある。

**平成29年(2017年)10月23日に上陸した台風21号**と、そのときの**川合善明川越市長の対応**だ。丁度2年前の事件だから、まだご記憶に鮮明だろう。

そのときの状況を簡単に振り返ってみよう。

**平成29年10月16日** 西太平洋カロリン諸島沖で発生した「**台風21号**」は、20日には「**超大型台風**」に成長、22日には近畿地方、東海地方を暴風域に巻き込んだ。

神戸市では52年ぶりとなる強風が発生。その威力に日本中が驚いたものだった。

台風 21 号はそのままの勢力で関東に接近し、上陸する可能性が高まった。

「**超大型**」のまま上陸した台風は、1990 年以降初めてだった。

台風 21 号の猛威が川越市を襲いはじめたのは **22 日の夜半**からだった。

川越市寺尾地区の「**中島雨水排水ポンプ場**」地域を中心に、広範囲にわたって浸水(内水被害)が始まったのだ。水害にも色々種類があるが、ここで「**外水被害**」と「**内水被害**」について説明しよう。「**外水被害**」とは大雨などで堤防を越え、あるいは堤防が決壊して、川の水が氾濫すること。「**内水被害**」は市街地の雨水などの量が多くて河川に流し込めず、市街地が水浸しになることをいう。

寺尾地区が内水被害で水が溢れ出た夜半、地域の住民は市に電話で土嚢の手配を依頼。ところが電話を入れてから 2 時間後の午前 3 時、風雨は今後ますます強まる状況にあった。何の動きも見せない **市に疑問**を抱いた被災地住人がもう一度連絡をしたところ、電話は「**道路環境整備課**」に回され、「**午前 5 時には土嚢を持っていきます**」との答えがあった。この時点、電話の内容が担当部署に伝えられていなかった。

**午前 5 時**、住人に市の職員から電話が入った。「**土嚢を持ってすぐ近くに来たが、浸水が酷く近づけない**」というのだ。改めて届けるという話がなされたが、土嚢が届いたのは **浸水から 1 週間近くたった** 29 日のことだった。後にわかったことだが、川越市は「**災害対策本部**」も置かず陣頭指揮を取るべき **川合市長本人は、自宅で「待機していた**」というのだ。

## 川合善明川越市長は「そのとき」どこで何を…？

平成 29 年 10 月 22 日 日曜日。「**超大型**」台風 21 号が近畿・東海を襲ったその日は、衆議院選挙の投開票日だった。日曜日ではあるが、超大型台風が接近している最中である。市民の生命財産を守るべき市長は、災害対策本部長として市庁舎に詰めるのが本来の姿である。ところが川合市長は「**市庁舎には行っていないが、22 日、市（災害対応部長会議）からの報告を自宅で逐一受けていた**」(10 月 30 日臨時議会答弁) という状況だった。



川合善明市長の 22 日の行動は、10 月 23 日『**埼玉新聞**』を見れば一目瞭然である。紙面には「**自由民主党・神山佐市氏の当選**」を報じる記事に川合市長が「**万歳三唱**」をやっている写真が載せられている。神山氏の左側には当時、自民党川越市議団代表の江田肇市議。

神山氏の右側には中野英幸県議会議員。そしてその隣には川合市長(川合市長の右隣には吉野郁恵市議も)。

川合市長は神山氏の当選確実の報が出るまで選挙事務所で2時間ほど待機し、当確の時点で「万歳三唱」をやって、そのまま**市庁舎には行かず自宅に帰った**のだ。

衆院選で3期目の当選を果たした神山佐市氏の選挙事務所で万歳三唱をやることは、川越市長としては当然かもしれない。しかし、その時刻は超大型台風が目の前に迫り、市民の生命財産が危機に瀕しているときである。自分の命を捨てても守らなければならない市民の生命財産の危機に際し、万歳三唱をして**自宅に引き返し籠ってしまう市長**。台風21号に対する**川合市長の取り組み方**については、その後も重大問題が次々と浮上してきた。

## 責任を職員に負わせ、自今は逃げ切る川合善明

川越市議会の記録などを読み解いていくと、川合市長の言動に辻褄が合わない部分が見えてくる。たとえば神山佐市事務所で万歳三唱をやった22日夜半から、寺尾地区の浸水が始まり土嚢が到着しなかった23日早朝に関して、川合市長は記者会見でこう答弁している。

**「22日夜から23日早朝にかけ、詳細な情報や報告は受けていない。寺尾地区については、それほど大規模な被害とは思わなかった」**（11月1日）

だが、この2日前の10月30日には前述のように市議会で**「22日は、市（災害対応部長会議）からの報告を自宅で逐一受けていた」**と答えている。この矛盾にご本人は気づいていないらしい。

本紙が22日を中心に状況を詳細に調査したところ、22日当日は**「防災危機管理室」**には市民からの電話が何本もかかっていたことが判明した。防災管理室には10人の職員が配置されているが、日曜日の当日は1人が休暇。残る9人のうち7名が対応。2人は選挙事務にかり出され夜になって合流したという。防災管理室は夜半から翌日まで**9人体制**で対応。各課から選ばれた現地調査班**13班を組織**し、担当地域を見回って**「災害対応部長会議」**に報告を上げる。

**「災害対策本部」**は甚大な被害が予想されるときに設置され、市長が本部長となって陣頭指揮をとる。隣接のふじみ野市では当日、高畑博ふじみ野市長が**「空振りでもよいから災害対策本部を設置しよう」**と万全の用意を布いた。ところが**「超大型」**の台風が襲来している最中に、川越市の川合善明市長は午後8時過ぎに神山選挙事務所を訪れ、10時前に満面の笑みで万歳三唱をやって、そのまま自宅に帰っている。

高畑市長と川合市長との市民に向けた**トップとしての責任感の有る無し**が明白に浮き出る。ふじみ野市民は最良の市長を選び、川越市民は最低の市長を選んでしまった事になる。川合市長の対応については『東京新聞』が2度にわたり記事にしている。

**「『情報伝達 不十分だった』 川越市長 対応の不備認める 台風21号浸水被害 臨時議会で答弁」**（10月31日）

## 「川越・浸水被害 市の対応に批判続出 説明会に470人 被災者『人災』の声も 市長、専門家交え検証表明」 (11月1日)

本紙はその後、建設部道路環境整備課職員・宮本建設部長・大河内危機管理監・川越市道路管理事務所・川越地区消防局・建設部河川課・上下水道管理センターの7部署・担当係官への聞き取り調査を実施したが、全ての部署・担当者たちが、熱意をもって市民を守り抜こうとしていたことが理解できた。そうした中、「現場の状況を上層部に報告する対応ができていない」「現地調査班が組織されてもその機能が生かされなかった」「現場と本部とのタイムラグが生じてしまう」などといった声が聞かれたのだ。

当然だ。最高責任部署である「災害対策本部」が設置されなかったからだ。

寺尾地区が台風21号により被災した後、平成29年10月30日の「第8回急施臨時会」や11月29日の「第9回定例会(12月議会)」において、川合市長が22日夜、自宅待機していたことや神山佐市事務所で当選の万歳三唱をしていたことについて、各市議より「不適切」ではなかったのかと追求されたが、川合市長は「不適切だとは思わない」と答弁している。また翌年、平成30年3月20日「第1回定例会」において、「(前回の議会で)不適切ではないというような答弁をされたという解釈でよろしいんですね」と小林薫市議より改めて質疑された川合市長は、「不適切とは思いませんというそういう答弁をただけでございます」と、寺尾地区被災時の自分の行動について「不適切」ではなかったと再び答弁をしている。川合市長の「不適切ではない」という断言は、謝罪も撤回もされないまま今日まで至っている。

川合市長の「不適切ではない」発言の他にも11月29日の「第9回定例会(12月議会)」では、被災地への視察について追及があった。川合市長は、25日の朝に現地視察を決め、その日に被災地区へ向かっている。

市議からの「川合市長は、24日の午後に寺尾地区の甚大な被害を確認しておきながら、現地視察を決めたのは25日の朝ということだが、なぜ直ぐに現地へ向かわなかったのか」との質疑に対し、川合市長は「24日、要望活動で県庁並びに国土交通省へ出向いていた。その移動の車の中でインターネットを見た。要望活動が終わったのが午後5時近くで、そのまま現地へと行けばよかったが、その時点の判断ではもう既に排水も終わっていることであるから直ぐに行かなくてもいいであろうという判断をした」と答弁している。まるで他人事、これが首長の発言かと耳を疑いたくなる答弁であった。今回の浸水被害で被災を拡大した最大の原因は、寺尾地区に避難準備情報が発令されなかったことである。さらに総合的にこの被害を検証していくと、陣頭指揮をとるべき市長が自宅に居て災害に対する対処を何一つやらなかったことが大問題であることが理解できる。この市長の姿勢は、市職員全体の士気低下にもつながっている。

## 異常気象、天変地異に襲われる全世界

このところ世界全域で異常気象・豪雨による洪水・地震・火山の噴火などが頻発している。**太陽黒点がゼロ**という日が続き、地球全体がおかしくなっている。

今年9月24日にパキスタン北部を地震が襲い、少なくとも**37人が死亡**している。

10月にはスペインやイタリア・フランスで壊滅的な豪雨・洪水が発生し、住宅の多くが**流されて**しまった。10月2日にはロシア・カムチャッカ半島の火山が**突如噴火**、噴煙が**10kmの高さ**に上がり、北半球の気象をおかしくすると予測されている。

同じ10月2日にはインドで大洪水が起き**1,600人以上が死亡**。10月11日には、この時期としては考えられない**大雪**が米国ノースダコタ州を襲い、**収穫前の農作物**が全滅した。10月末には、メキシコや米国の太平洋側で**巨大な森林火災**が発生。

手の打ちどころがなくなっている。同じ時期にサウジアラビアでは**豪雨が3日間続き7人が死亡**。間違いなく世界レベルで自然災害が多発している。おそらく非常に近い時期に、日本でも火山噴火や巨大地震が起きるだろう。そんなとき、自分の身は自分自身で守るしかない。しかし第一次被災の後、生き残った人々が頼るのは、何といっても行政である。千葉県森田知事や川越市の川合市長のような**無責任首長の地域**では、仮に豪雨や地震で生き延びても、その後が危ない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

川合善明市長は、父親の川合喜一氏が元川越市長であったことと、善明氏が現職の弁護士で知識人であるとの先入観から、当初、多くの人々が彼を支持した。

最初に市長選に立ったとき、川越高校の同窓生たちや民主党を殆めとする市議たちは、川合善明氏に対する献身を惜しまなかった。当選後の川合市政を支え、市民のためになる市政を運営しようと、市議や川越高校出身の職員が川合善明市長を盛り立てた。

ところが川合善明市長、その任にそぐわず今はどうだろう。当初のブレーンは、誰一人として残っていない。市長に苦言を呈する者を遠ざけ、切り捨ててきた結果である。こんな市長に生命財産を託すことはできない。そのことを踏まえ、川越市民自身が**市長の選択が如何に大事・大切**であるかをはっきりと意識する必要がある。■